

「宗教批判」のこと

津田 雅夫

(岐阜大学)

「民衆宗教」については既に研究の長い歴史があります。多くは「民衆宗教と国家神道（体制）」との関係を問うものであったかと思えます。それらの研究は多くの学問的成果を生み出してきました。その蓄積の上に、今日の議論もあります。しかし同時に、「国家」と「宗教」の関係について、それほど鮮明な像が結ばないのも現状です。「民衆宗教の思想的深度」という課題が改めて問われる所以です。

思想の「深度」といったことが問われるとき、「解放性」や「抑圧性」といった方向性を問わず、「宗教」という思想形態の潜在力そのものが、まず問われます。今日、「民衆宗教」について、このことを明確にする必要があります。そのためには、一方では個別の現状調査が不可欠になります。他方、「民衆宗教」について考える視角や方法についての方法論的反省が新たに求められます。ここでは後者について少し考えてみます。そのさい、「宗教とは何か」という根本の問題は暫く傍らに置いておきます。この問いの広がりや深さについて答える能力はありません。ただ、接近するための方法について幾つか反省してみるに過ぎません。

一つ目の切り口は、「生きる術」（フォイエルバッハ）としての宗教の側面です。「野生の思考」（レヴィ＝ストロース）と呼んでもいいのですが、ともあれ、人間は生きていかなければなりません。そして、生きていくために役立つと思われるものは、すべて利用しなければなりません。あり合わせの手段をすべて動員することになります。そのとき、「想像力的存在」である人間にとって、生き延びるには、真・善・美以前に、「信」が必要になります。「信」が生存と手段を結合し、裏付けてくれます。この「信」は、しかし、すぐさま「信仰」を介して「宗教」という形態を取る必然性はありません。むしろ今、この関連が多様な仕方で緩んでいます。この伸縮における振幅が特徴的なように思います。

二つ目の切り口は、「日常性」と「習慣」の側面です。「宗教」という形態化は、イデオロギーとして、日常の生活意識の核心を構成するものとなります。マルクスの云う「日常生活の宗教」です。しかし、これはそのまま「虚偽意識」ではありません。むしろ人間生活の支える「日常性」と「習慣」を成り立たせる基盤として機能します。逆に言えば、この「日常性」に亀裂が生じたとき、精神病理が生ずることになります（フロイト）。そして、こうした「危機」の局面において、「宗教」は「信仰」を介して「信」に帰還することが求められます。この往復運動を保証する＜思想伝統＞が問われます。とくにこのことは、媒介としての「信仰」の性格に由ります。「信仰」の多様性（その承認）が重要です。

三つ目は、「批判」という切り口です。「宗教」と「批判」との区別と連関が、ここで問われます。「宗教」が巨大な内包を持つとすれば、「批判」もまた、現実性から哲学・科学・啓蒙まで、多岐多様な姿を取ります。しかし、ここで問題にしたいのは、「宗教」と「批判」という二つが重なる部分についてなのです。宗教に内在する批判性、批判に内在する宗教性、この二つを関わらせてみたいのです。それぞれが自らの自己否定的な契機として、この二つの契機を孕んでいることが面白いところです。また、この契機についての一定程度の自覚が、「宗教」を「宗教」とし、また、「批判」を「批判」とらしめています。そしてこの自覚が、「宗教」と「批判」において、一定程度、既に＜内在＞しているという点が重要だと思います。

(発表では以上の点について、「宗教批判」の問題として、日本思想史に即して話す予定です。)